

2026 年度 入学試験問題

教育学研究科

学校教育専攻（修士課程）

「小論文」

（2 期）

受験番号	氏 名

文教大学大学院

下記の問題について、1,000字以内で論じなさい。ただし、文章は横書きとし、段落を適宜に設け、常体で書きなさい。

【問題】

以下は言語脳科学を専門とする酒井邦嘉の文章である。筆者の主張をあなたの言葉で簡潔にまとめた上で、最近の学校教育の動向を視野に入れながら今後の学校教育のあり方について、あなたの考えを述べなさい。

すべての教育は模倣から始まる。模倣は、あらゆる思考や表現の土台となる「型」である。この模倣なくしては創造もない。それは、自分勝手に体を動かしても、決して踊りやダンス、バレエにならないのと同じである。模倣して身につけた型を「再帰的に」再構成することによって、新たな表現が生まれる。模倣は創造の母である。

学校での模倣となると、昔は筆写が基本で、書き写しながら頭に入れていった。その後、複写機が誕生し、苦も無くコピーができる時代になった。大学生はその恩恵を我先にと受けて自分でノートをとらなくなり、試験前にはコピー機の前に行列ができるようになった。そして次第にパソコンが使える時代へと移り、電子ファイルのコピーが瞬時にできるようになった。もはや紙の複写に頼らずともすむ。30XX年には、そのまま脳にコピーする時代が来るだろうか。

中略

「書く」という行為を「手間だ」、「無駄だ」と考えるか否かが、知識を自分のものにできるかどうかの分かれ道になる。なぜなら、書くことで、意識的に自分で考える時間や必要性が生まれるからである。この考えるゆとりがなければ、知識は十分に咀嚼されないだろう。教科書を表面的に読むのは受動的なスキャンにすぎないので、知識として定着したかどうかは自分でも定かではないはずだ。一読してわかった気になるようでは、横着にもほどがある。

中略

板書の筆写などは効率が悪いと思うかもしれないが、すでに説明したように、それは記憶に定着させるための最良の方法なのである。教科書などにある定理とその証明をノートに書き写すことも同様で、書き写しながら、次に何が来るかちょっと考えてみる。そして、自分の予想が合っているか、教科書を見て確かめながら、またそれを書き写すのだ。そうやって書き続けることで、知らず知らずのうちに自分の脳を創っているのである。すると、次に似たような問題が出てきたときにも、自然と解けるようになっていくのだ。逆に、書き写さずに眺めてわかったつもりになったのなら、同じ問題ですら自力で解けなくてもむしろ不思議はないのである。どこにつまづいて先に行けなくなるのか、ということに自分で気づく機会がなかったのだから。

(酒井邦嘉(2011):『脳を創る読書 なぜ「紙の本」が人にとって必要なのか』、実業之日本社より抜粋した。)